# 大学および附属小学校における和楽器学習の実践

## －箏に触れ合おう－の実施報告

前田則子
（奈良教育大学　音楽教育講座（器楽））

## Report on the Practice of the Japanese Instruments Learning in the University and Its Attached Elementary School : The Case of Koto Playing

Noriko MAEDA
（Department of Music Education, Nara University of Education）

**要旨**：小中学校の音楽科授業の学習内容に、日本音楽が占める割合は少ない。その中に和楽器の実習体験を取り入れることは容易ではなく、その必要性や意義への認識が薄れていく現状がある。奈良教育大学では、大学と附属小学校が連携して、和楽器学習の実践に取り組んだ。音楽の教員を目指す学生が箏の演奏法を本格的に学んだ上で、児童たちと大学生が共に箏の実習体験をするという企画である。本報告では、その実践報告と参加者たちの感想を紹介する。

**キーワード**：和楽器学習　practice of the Japanese Instrument
箏　*Koto*
大学－附属小連携　cooperation between University and its Attached Elementary School

### １．はじめに

平成10年文部省が行った中学校学習指導要領の改訂により、中学校音楽科の器楽指導において「1種類以上の和楽器を体験する」ことが示された1。奈良教育大学音楽教育専修では、平成11年より教科専門科目「日本音楽実習Ⅰ」及び「同Ⅱ」の授業を開設し、和楽器の演奏実習を体験させてきた。種類は、三味線、長唄、箏、打楽器である。卒業生たちがその経験を教育現場で活かせているのかは疑問である。その原因として、各中学校に必要数の和楽器を設備することが困難であること、和楽器演奏法を専門的に指導できる音楽の教師が少ないことが挙げられる。全国的にみて、和楽器に関する学習活動が定着していないのが現状である。

一方、小学校音楽科の器楽指導において、和楽器については特に言及されていない。一部では1年間を通して和楽器実習を行っているケースもあるが、現場の殆どが手探り状態となっている。

このような現状を踏まえ、音楽教育講座では「日本音楽実習Ⅱ」の授業内容の充実に向けて、箏の本格的な学習に取り組むことを計画した。平成25年度学長裁量経費により、新たに授業用箏9面を購入し、履修学生1人に箏1台の配備を可能とした。

さらに新しい試みとして、大学生だけでなく附属小学校の児童にも箏に触れる体験をしてもらうことを提案した。箏は旋律楽器として音が出しやすいこと、絃の位置を目視で確認できることなど、手の小さい小学生でも実際に触れて演奏可能な楽器であると考えられる。大学生と小学生が箏を通して協同実習することにより、日本音楽の良さと楽しさを共に味わうことをねらいとしている。

### ２．平成25年度　音楽教育専修教科専門科目「日本音楽実習Ⅱ」の授業内容

本授業は音楽教育専修3回生を対象に後期開講し、今年度は「日本音楽実習Ⅰ」（前期開講）に引き続いて18名が履修した。このうち10名は、中学生または高校生の時に箏に触れた経験がある2。演奏法に関しては全員が初心者であり、授業は楽器の扱い方や調弦の仕方から始めた。およそ4回で一つの楽曲を仕上げ、徐々に難易度が上がっていく（表1. 授業計画参照）。附属小学校で演奏発表した＜花筏＞（全曲）は12月より練習を開始した。この曲は2パートに分けられており、全員が両パートを習得した上で合奏練習を行った。

なお、箏は全て音楽棟第2アンサンブル室に保管している。原則として授業以外は使用禁止となっているため、通常は授業時間内のみの練習となる。

表1 「日本音楽実習Ⅱ」授業計画（シラバスより）

| 回数 | 内容 |
|---|---|
| 1. | 楽器の特性、基本奏法の説明。講師演奏の鑑賞（柳川三味線・箏の現代音楽）。 |
| 2. | 箏の取り扱い方、調弦の仕方実習。初歩の曲＜さくら＞の演奏実習。 |
| 3. | ＜六段の調べ・初段＞（平調子：八橋検校作曲）演奏実習。古典奏法を学ぶ。 |
| 4. | ＜六段の調べ・初段＞の演奏に合わせ、口伝教授＜唱歌＞の練習・試験。 |
| 5. | ＜六段の調べ・初段＞演奏実習。 |
| 6. | ＜六段の調べ・初段＞演奏試験。 |
| 7. | ＜花筏＞（平調子より四・九半音上げ：沢井忠夫作曲）第1箏パートの演奏実習。 |
| 8. | ＜花筏＞において様々な現代曲奏法を学ぶ。 |
| 9. | ＜花筏＞（平調子より四・九半音上げ：沢井忠夫作曲）第2箏パートの演奏実習。 |
| 10. | 同上。第1箏パート・第2箏パートの合奏練習。 |
| 11. | 同上。附属小学校での演奏を踏まえての練習。現場での小学生への教授法について。 |
| 12. | 附属小学校にて箏授業実習。次回修学予定 ＜春の海＞鑑賞。 |
| 13. | ＜春の海＞（平調子より六・斗半音上げ、一は六の乙：宮城道雄作曲）演奏実習（一部）。 |
| 14. | ＜春の海＞の演奏において、表現力や、より美しい音色・奏法を探求する。 |
| 15. | ＜春の海＞（一部）演奏試験。 |

## 3．附属小学校における和楽器学習の実践
## ―箏に触れ合おうー：実施

### 3．1．当日までの流れ

附属小学校の音楽専科を含む2名の教諭と「日本音楽実習Ⅱ」担当の林美音子氏（本学非常勤講師）と共に、実施に向けて打ち合わせ会議を2回行い、以下のことが決められた。

・実施日時：平成26年1月21日（火）13:45～14:25
　学生たちの演奏が上達した後期末で、附属小学校の全校・学年集会の時間を利用する。当日大学生は12時に集合し、事前練習を行った後、会場へ楽器を運搬・設営する。

・対象者：附属小学校4年生
　当初は、全校児童に対して行うことを考えていたが、限られた時間内に全児童が和楽器に触れることは不可能に近い。児童たちが平等に体験できることを念頭に、附属小学校で検討してもらった。附属小学校の音楽科授業において日本音楽に関するものは唯一、第4学年
　1学期に＜さくら＞を歌唱するのみである。＜さくら＞の冒頭部を箏で弾くことは、初心者でも可能であることから、対象者を4年生に定めた。

・内容：和楽器演奏の鑑賞、および実習体験
（詳細は 3.2. 当日のプログラム 参照）

・場所：奈良教育大学附属小学校体育館
　寒い時期ではあるが、それなりの広さを必要とするため体育館とした。児童たちには座布団を用意してもらう。体育館での配置や響き具合等について、事前にチェックを行う。

・配布資料
　プログラム、＜七福神＞の歌詞

### 3．2．当日のプログラム

＊5時間目：「鑑賞」
＜花筏＞　～箏19面による学生の演奏～
＜七福神＞　～柳川三味線と長唄～（林氏ソロ演奏）
＜春の海＞　～箏とフルートの二重奏～
（箏：林氏、フルート：4回生）
演奏の合間に楽器･曲目の解説をする（林氏）。

＊6時間目：「実習」
・箏1面につき学生1名を配置し、児童6、7名のグループを作って座らせる。
・児童の指にテーピングをし、弾く前には親指に「爪」をつける。
・正座にて伝統的な作法による開始時の礼をする。
・部位の名称、構造、正しい姿勢と弾き方を説明。
・まん中の弦を探し、鳴らす。
・学生が弦を押さえる等補助しながら、鳴らす。
・＜しろねこ くろねこ まだらねこ＞の歌とともに13弦を弾く。
・終了時の礼をする。

### 3．3．実　施

当日は準備から本番まで、プログラムに沿って首尾よく進行した。児童たちの反応は予想以上で、鑑賞・実習共に大いに盛り上がった。学生たちの演奏は大変すばらしい出来であった。3ヶ月半前に初歩の段階から開始して、人前で演奏発表するにまで至ったことは、短期間で十分な成果が得られたことと認められる。

当日の参加者は、以下のとおりである。
附属小学校4年生：94名、
音楽教育専修3・4回生：18名、
附属小学校長、
4年生各クラス担任の先生方、
音楽専科教諭：2名、
林美音子氏、
大学教員：3名（音楽教育講座）

## 4．参加者の感想

終了後、参加者に感想を書いてもらった。児童たちは各クラスによって取り組み易い形式（日記あるいは感想文）で書いてもらうことにした。学生には次の2つの課題についてレポートを提出させた。

①自身の演奏発表を含め、授業を体験して感じたことや、児童たちの様子について
②自分が教育現場に立った時、「和楽器授業」を実施する場合の考え。

### ４．１．児童たちの感想

殆どの児童たちが初めて和楽器に触れたことから、その感動や喜びが多く書かれている。また、音色に関する記述は多彩で、児童たちがそれぞれの感性で素直に感じた表現は印象的である。

以下に、児童たちの感想を「鑑賞」と「実習」に分けて紹介する。

＊「鑑賞」についての感想
・体育館中に美しい箏の音色が響き渡って、みんなは一気に静かになって吸い込まれた。
・静かな音からフワンと大きな音に変わって、音が和風できれい。
・すごくいい音で、大学生の息がぴったり合って夢中になって見た。指の動きが速い。
・箏の特徴ある音が体に響く。音が大きくなったり小さくなったりするのがすごい。
・目をつぶって聴くと、森と滝に圧倒された気がした。音に圧倒されたのは初めてだ。
・昔にタイムスリップしたみたいだ。浦島太郎は竜宮城でこんな音楽を聴いたのかな。
・弦が何本あるかなと思って見ていた。
・三味線は小さいのにすごい迫力だ。とても響いてきれい。
・三味線はギターと同じと思っていたけど、音が違う。まろやかだ。
・箏は高い音で三味線は低い。音は似ていて穏やかな感じだ。
・歌はお寺のお経のようだ。声がしぶくてかっこよかった。
・古い歌はゆっくりで、しゃべっているようだ。
・七福神のことがよく分かっておもしろかった。
・フルートと箏はきれいな音だ。波のようだ。やさしくもしっかりした音だ。
・西洋のフルートと和楽器が合うのかと思っていたがピッタリだった。

・フルートと箏のリズムが完璧に合っていた。
・２つの楽器のきれいな音が重なって気持ちよくなった。幻想的だ。
・フルートはリコーダーよりずっと長くて音がきれい。
・箏の暗い感じの音とフルートの明るい感じの音が合わさって素晴らしい音楽になったのは、意外だった。

＊「実習」についての感想
・箏は聴いたことも触ったこともなかったから、とても楽しみにしていた。
・自分で弾いていい音が鳴ってめっちゃよかった。
・きれいな音が出てうれしかった。近くで聴くととても柔らかい音だ。
・爪をつけて軽く弾くのと強く弾くのとでは、音が全然ちがう。
・爪なしだと指がすごく痛い。弦がきつく張ってあるから痛いんだ。
・弦が長くて固くてびっくりした。
・「ピン！」としか鳴らないので、次は力を入れたら「ピーン！」と良く鳴った。
・弾いた後の弦をさわると「ビビビーン」と響いている。体にジーンと振動する。
・手前の方は高い音で、遠い方が低いことに気づいた。
・音階は数字でドレミがない。楽譜が音符でないのは日本の知恵だ。
・少しコツがつかめてうれしい。力を抜いて弾くと音が大きくなった。
・大学生が「めっちゃうまい」と言ってくれてうまくなった気がする。
・順番が回ってくる度にうまくなって楽しくなってきた。
・＜しろねこ　くろねこ　まだらねこ＞がおもしろい。自分で替え歌も作った。
・箏は地味だと思っていたけど触ってみるとすごい迫力。
・箏は楽しい楽器。思い切り響くからいい楽器だ。
・和楽器のしっとりした音色が好き。昔の人はいい物を作った。
・難しいけど楽しかった。また体験できるといいな。また来てくれるといいな。
・箏ひくなんて一生に１度。体験できてよかった

### ４．２．学生の感想

当初学生たちは、冬期休暇や休日等で練習が存分に出来なかったため、初めて人前で演奏することに不安を覚えていたようだ。本番演奏がうまくいったことで自信を持ち、充実感を得ている。また、児童たちが大変興味を持っていることに驚きや喜びを感じ、現場に出た際の和楽器授業に対する価値感を見出したようである。

以下に、学生の感想を紹介する。

①—①演奏発表について

・今まで授業で練習に励んできた成果を大勢の児童たちに聴いてもらうのは、とても新鮮だった。
・発表する機会を通して、箏に対する考えが変わった。
・演奏中の静けさの中で、邦楽独特の神聖な音楽的空間を共有できた貴重な体験だった。
・体育館はよく響き、箏ならではの優雅な音色に心を奪われた。
・箏の合奏はテンポを合わせることが難しい。指揮者なしで息を合わせることは、和や協調性を重んじる日本人に則しており、日本らしさをとても感じた。
・演奏は難しかったが、全員で１つの音楽を作り上げられたことに充実感を得た。

①—②児童たちの様子について

・児童たちは予想以上に興味を持っている様子で、よい演奏を聴かせねばと思った。
・みな興味津々で、楽器に早く触りたくて集まって来た。終わっても弾き足りず、楽器から離れなかった。
・教えてあげるとすぐに吸収して弾くことができた。興味があるとすごい集中力だ。
・グループ全員が一生懸命に取り組んだのは、ふだん和楽器に触れる機会がないからだと思う。
・音が鳴ることに純粋に喜ぶ姿を見て、楽器に触れることが児童たちにどれだけの感動を与えるかを実感した。
・音楽では実際の演奏経験がずっと記憶に残るので、お互いに貴重な体験となった。
・箏を学び始めたばかりの私たちが指導するのは不安だったが、こどもたちに教えることによって、自分の技術をもう1度見直したり考えさせられた。

②　現場で和楽器授業を実施する場合の考え

・伝統音楽に触れる機会が少ないので、音楽の授業で積極的に取り入れたい。
・実際に和楽器がある学校は少ないので、映像資料をうまく活用して興味をもたせる。
・様々な和楽器の仕組みや歴史を学習した上で、実際に生の音を聴かせてあげたい。
・和楽器奏者を招いたり、歌舞伎や能鑑賞に連れて行き、生で感じ取って欲しい。
・奈良では春日大社などで身近に耳にすることができる。
・音がどんな風に鳴るのか実物に触れ、昔の人たちがどのように作ったか考えさせる。
・箏は他の和楽器より演奏しやすいと思うので、短時間でも実際に触れさせたい。
・座り方、弾き方の注意をきちんと指導して守らせ、＜さくら＞の1部分を弾けるような授業展開を考えている。児童の記憶に残るようにしたい。
・実際に演奏体験させるためには、教師である自分が勉強しなければならない。
・日本の伝統音楽をしっかりと理解してもらい、大切に守ることを学ばせたい。

その他、附属小学校先生方から以下のような感想・意見が寄せられた。

・１回目にしてはよかった。
・児童の反応もよかった。
・やはり本物に触れるという所が何よりも児童にとっていいことだと思う。
・来年度以降については、日程・場所・実施方法・授業の進め方等についてまた相談しながら進めたい。

## ５．アンケートの実施

「日本音楽実習Ⅱ」の全授業終了後、学生たちにアンケート調査を行い、17名から回答を得た。

「Q. 附属小学校での和楽器実習は、あなたのためになりましたか？」という質問に対しては、全員が「とてもためになった。」と回答した。

「Q. 小・中学校音楽科教育の中で、和楽器実習を必要と思いますか？」に対しては、全員が「必要と思う。」と回答した。

「Q. 児童たちに和楽器１種類を体験実習させるとしたら、何が適していると考えますか？」に対しては、13名が「箏」、4名が「三味線」を選んだ。

以上のことから、今年度の新たな授業内容は、和楽器学習に対する学生たちの興味・関心を高め、その必要性を認識する上で大変有意義であったと言える。和楽器の種類については、三味線を用いて同様の体験学習を行った場合、回答が異なってくることも予想される。

## ６．おわりに

今回の取り組みは、教育大学における日本音楽実習の新たな方向性を見出した。授業目的は、楽器の演奏技術の習得であるが、学生たちは、その技術が教育現場で活かせるのか、どれほどのニーズがあり、本当に教育効果を見出すことができるのかと疑問に思ったり、受け身で臨むこともあったのではないかと推察する。しかし体験学習の本番に向けて、目的や使命感を持って練習を重ね、達成感を味わうことができた。更に、児童たちが新しい物に触れようとする知的好奇心の旺盛さを、身をもって知ることができた。それこそが本大学ならではの重要な学び・発見である。児童たちにとっても、身近な大学生の真剣な演奏を聴き、言葉を交わしながら和楽器に触れたことは、心に残る貴重な体験となった。

今後の課題は、附属小学校との連携を密にし、和楽器の体験授業をより効果的に行う方法を探ることである。例えば、４年生の各クラスの音楽授業で和楽器実習を１時間ずつ組み込めれば、さらに内容が深められる。また、大学の授業においては、和楽器を児童たちに教える際の実地教授法を取り入れ、スムーズな授業展開が行えるよう指導する、などが挙げられる。

今後も継続することにより、大学における特色のある授業として発展でき、附属小学校における和楽器の授業開発に新しい方向性を築くことが可能となる。将来的には、その成果が公立小学校の現場に活かされることと期待される

## 謝　辞

体験学習実施あたり、箏をご指導下さいました林美音子先生、企画から感想文の提出まで多くのご協力を頂きました附属小学校の先生方、ご助言を賜りました音楽教育講座の劉燐玉准教授に深く感謝申し上げます。

## 註

１．中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—音楽編—、平成11年９月、文部省、p.5
２．全授業終了後に行ったアンケート調査による。